
童話冒涸物語。

摩璃藻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

童話冒涇物語。

【コード】

N4955D

【作者名】

摩璃藻

【あらすじ】

タイトルのまんまです。中には元々が何の話なのかわからない物もありません。

赤ラントンちゃん。(前書き)

赤ずきん 赤ラントン。
一番意味わかりません。

赤ランタンちゃん。

昔昔ある所に、『赤ランタンちゃん』と呼ばれる女の子がおりました。いつも赤いランタンを持つているからです。

禍禍しい形をした赤いランタン。その赤はまるで血のように鮮やかです。

赤ランタンちゃんは今日、急にお婆ちゃんの作ったさっぱりアップルパイが食べたくまりました。

善は急げ。赤ランタンちゃんは早速、森の中の病院の集中治療室に居るお婆ちゃんの元へ向かいます。赤ランタンちゃんは馬鹿でした。

森の中を歩いていると、畏にかかっている桃色の髪の青年を見つけました。ハンサムです。細身の筋肉質です。

「お、ちよつとそこのお嬢さん！ この畏外してくれないか？」
「畏？」

「ああ。俺は見ての通り豚なんだが、ちよつとな」

豚と言い張る青年です。馬鹿度は赤ランタンちゃんに匹敵します。

「豚にしちゃーほつそりですねー」

「さつぱりだぜ？ 助けてくれたらトリユフ見つけてやるから、頼む」

「ごめんなさい。私こつてり推奨派ですからー」

こつてり推奨派なら何故さつぱりアップルパイなんでしょうか。

「じゃあ自分で外す」
「がちゃ。」

「助けてくれて有難う。お礼に鬼退治に付いて行ってやるよ」

「結構ですー」

「そうこなくちゃ」

建前で言った豚の一言に感激した赤ランタンちゃん。綺麗に断り、豚もめんどくさがりだったので、このままでは物語がすすみません。

ので、とりあえず付いていく事にしました。

歩いていると、今度は眠っている緑色の髪の可愛らしい少年を発見しました。

赤ランタンちゃんに押されて、豚は少年の上に馬乗りになりました。少年が目を覚まします。

「眠りの魔法をかけられていたのだ。助けてくれて感謝する。私は河童だ」

「自分の事私って言う男はちょっとー」

豚に言った一言に勝手に返事をする赤ランタンちゃん。

「しかし腹が減った」

「食べますかー？」

赤ランタンちゃんが差し出した胡瓜を食べる河童。

感激して一人と一匹のたびに付いていく事にした河童。

歩いていると、今度は林檎を食べている茶髪の青年を発見。

「バナナより美味！」

そんな事言っちゃ駄目だ。

赤ランタンちゃんは木を蹴りました。青年が落ちてきます。

「いとうば！」

「礼は？」

「ひえっ」

いつのまにか赤ランタンちゃんに惚れていた豚は、青年にトリュフをつきつけます。見目が良ければ上手くいくという教訓です。

「旅に付いて行きますです。へえ」

「死んで下さい糞猿ー」

猿が嫌いだっいたらしい赤ランタンちゃん。いつのまにかキツイ事言う女の子になっていました。

「来たな赤ランタンちゃん！」

そこに居たのは黒ランタン君でした。赤の反対色知っている人教えてください。

「誰でしたっけー？」

「ぐっ！ 黒ランタンだ！」

「パチモンですかー？」

知らないのも無理ありません。だって初対面ですから。

「いつもいつもお前に勝てた事は無い！」

勝負した事ありませんからね。

「今日こそ勝つてやる！」

「何を買ってくれるんですかー？」

「違う！ 勝負するんだ！」

「お花ですかー？」

「菖蒲じゃないから！」

話があまりかみ合わないランタン達。弟餅たちは置いてけぼりで
す。ちなみに誤字脱字はしてませんよ。

「糞、調子が狂う！」

「あー」

「たー」

「りー」

「まー」

「えー って違う！」

ついつい乗ってしまった黒ランタン君。

そろそろこの物語もお仕舞いです。

「早っ！」

ツッコミナイスだ黒ランタン！ 頑張れ菖蒲を買った日まで！
では、また次回

アンジェリーナ。(前書き)

シンデレラ アンジェリーナ。

一番面白くありません。

アンジェリーナ。

昔々あるところに、『源三郎』と呼んで欲しい少女がおりました。少女は義姉さんの元に向かっていました。

「ちよつと義姉さん！」

「どうしたの、アンジェリーナ」

「源三郎って呼んでって言うてるでしょう！」

義理の姉は目の前の金髪ツインテールのちいさな女の子（義理の妹）を見て、折角可愛いのになあと思いました。

「頼むから私のタンスの作業着、全部ビラビラドレスにするの止めて！」

「折角アンジェリーナ可愛いのに」

「動きにくいじゃないの！」

「働かないでよ、召使がいるのにい」

義姉は頬を膨らませます。アン……源三郎の方が可愛くてもそこそこの顔はしているので普通に可愛いです。

「それより王子様が結婚相手募集パーティーするんだって。アンジェリーナ、行きたい？」

「別に」

「よね。アンジェリーナは一生私達と暮らすもの」

「それはそれで嫌ね」

アンジェ……源三郎は溜息をつきます。

源三郎の将来の夢は一人暮らしですから、いつか家出しようと考えています。しかし家には逃亡防止の罾が大量に張り巡らされているので、今は頑張って盗賊の修行中です。

いつその際パーティーの途中に逃げてしまおうか、とも考えましたが、男なんて近づくのも嫌なので諦めました。

源三郎は義母のもとへ向かいました。

「義母さん」

「アン、パーティ行かない？ お母さんは行かないけど」
「いかないわ」

「そう？ じゃありユーガがエンテラね。玉の輿よ玉の輿」

「……………リユーガ義兄さんは止めてあげて。可哀想よ」

「まあ昨日攫われたけど」

「さっ！？」

今聞く衝撃の事実には驚く源三郎。そしてたいして心配していない義母にもっと驚く源三郎。

「……………いいの？」

「いいわよ、別に。お金いっぱい貰ったし」

「やつぱりか」

源三郎は大体予想してたようです。

〜王子サイド〜

「父さん、どうして僕だけがパーティに出るんですか？」

王子、フユトが言いました。

「兄さん達が出ればいいじゃないですか」

「それがな、フユト……………。ハルトが記憶喪失になってな」

「記憶喪失！？」

「ナツトとアキトも」

「……………そんな馬鹿な……………」

「ハルトは自分の事を豚だと思い込むし、ナツトは自分の事を猿だと思い込むし、アキトは自分の事を河童だと思い込むし……………」

「何その天竺三点セット」

「多分ハルトは前日に食べていたトリユフ、ナツトはバナナ、アキトは胡瓜のせいだと思う。城から逃げだしてな」

まさか兄弟が赤ランタンちゃんの下僕になっているとは思っていない王様とフユト。

「よろしく」

「嫌ですよ！ はーあ、散歩してきます……………」
フユトは日課である散歩に向かいます。
私服で行くので王子だとばれていないと思っっているフユトですが、実際には護衛が後ろの方にいるのでバレバレです。しかも顔割れます。

「……………ん？」
アンジェリーナが窓の外をちらりと見ました。いつもはこの時間、閉められている窓です。

「……………！……！」
アン……………また間違えてた、源三郎は驚きました。散歩している少年が自分のもろ好みだったからです。

そして護衛の存在で、少年が王子だという事に気付きました。
という事は、パーティで……………

源三郎はすぐに義母のもとへ向かいました。

「パーティ出るわ」

「あらそう？」

しかし何という事でしょう。源三郎の好みにあうドレスなんてありません。

あと三十分で開始です。

「くっ、どうすれば……………」

……………えっ、僕？

えー、でも……………むー、はいはいやればいいんでしょやれば……………

僕は仕方なく黒いローブで全身覆い隠し、源三郎の前へ進み出ました。

「だっ、誰!？」

僕は通りすがりのナレーターです。

「……………はっ、だから思考に話しかけられてるのね!」

ええまあそうですね。はい、ドレスです。

それは紛れもなく……………「THE KUNOITHI、AND、S

AMURAI」でした。

「ナイス！」

そして源三郎はパーティへ。

「初めまして、アンジェリーナです。いきなりですがかけおちし
てください」

「え？」

「有無は言わせない！」

そう、まるで怪盗のように………源三郎改めアンジェリーナは
フコトを攫って行きました。ちゃんちゃん

白野 雪人。(前書き)

白雪姫 白野 雪人。

一番犯罪くさいです。

白野 雪人。

「鏡よ鏡、この部屋で一番可愛いのはだあれ？」

『それは貴方様でございます』

「鏡よ鏡、この世界で一番可愛いのはだあれ？」

『それは白雪姫です』

「だよー。白雪ちゃん可愛いし」

「っ誰が可愛いだあー!？」

部屋に飛び込んだきたのは白雪姫です。

真っ白な髪の毛に桜色のワンピースが絶妙にマッチ。裸足というのもそれはそれで何かをそそります。

「俺には白野しんの 雪人ゆきひとっっー名前があんだよ！」

彼の一番元の名前です。

「お母さんから買ったしー」

『名前を変える権利も頂いております』

「そーゆーわけで君の名前は白雪姫だっ」

「ましであつてましじゃねえー!!」

白雪姫は頭を抱えます。

「……こんなはずじゃなかったのに……異世界トリップしてリュ
ーガなんて名前つけられるし……俺の平穏な生活はどこへ……?」

白野 雪人

性別：男。

純粋な日本人ですが、白い髪に赤い瞳をしています。

「ああ……マイ・マドンナ日比野さん……奥野なんて目じゃない
ぜ……なんだよ、皆皆菜々子さん菜々子さんって……幼馴染の俺と
してはアイツの何が良いのかわからねえ……」

現実逃避です。

奥野菜々子。クラスのマドンナ。

「白雪ちゃん、バラを赤く染めてきてー」

「阿呆か!？」

「赤ランタンの血でー」

「何だよそれ!？」

「赤ランタンはー、私のだーいすきな黒ランタン君のライバルだから。ぶっころーす」

「物騒だつて!！」

「ぎゃーぎゃー騒ぐ二人。いつもの光景です。」

「白雪ちゃん、豚と猿と河童に遭つてきてー」

「無理!！」

「問答むよーう」

「ぎゃあああああああ!！」

大砲で吹っ飛ばされる白雪。

「いつてー……」

白雪は頭を抱えます。

「……………」

そして現実逃避開始。

『雪人…………』

身長180センチちよいの雪人。

そして自分を上目遣いで見つめる日比野さん…………いや、雪華。うつすらと開かれた赤い唇がなんとも欲情をそそります。

雪人が雪華の首に口をつけると、

『あ…………』

雪華の口から甘い声がもれます。

ちゅ、ちゅ、と音を立てながら、雪人の口は何かを求めて下の方に向かいます。

『駄目……これ以上は……』

雪華は弱弱しく制しますが、雪人はとめません。

雪人の手がいやらしく雪華の背中をなぞりました。

『いやっ……』

思わず、雪華の口から切なげな呟きが漏れます。

そして、雪華の手が ……

『死ねーっ!!』

雪人をぶん殴りました。吹っ飛ぶ雪人。

『調子にのるんじゃないねえ!』

げしげしげしげしげし。

そして彼女は去ってゆきました。

「ふっ……それでこそマイ・マドンナ日比野さん……!!」

妄想でもそうなるわけね。

「ひっ、いいいいいいっ!?!」

雪人の背中を指がなぞりました。細くて長い指です。

「だ、誰だ!?!」

振り返った雪人が見たものとは。てれっつてれっつてれっつてれっつてれっつて。れっつてれっつてれっつて。

〜続く〜

「うおーい!?! しかも何ゆえサ○エさん!?!」

「無視ー?」

見たものは、青い髪で爽やかなイケメンの青年でした。

「……誰?」

「ゴキブリ?」

どんだ。

「そうか。ゴキブリ、森の外に案内しやがれ」

「ごめん、さっきのは冗談。本当は幸せの青い鳥」

「早くしろ。ゴキブリ」

「冗談。突然変異の狼さ」

よく見ると耳が生えてます。

普通に人間の。

「駄目じゃん」

「う……僕は美少年と微少女が好きな」

「まて、一部違うぞ」

「好きなロリコン、シヨタコンの変態さ」

「……へー」

立ち去ろうとした雪人の肩を、変態がつかみます。

「いただきます」

「いぎゃあああああああ！？」

押し倒され、服を半分程破られてしまった雪人。

変態は爽やか笑顔です。

「助けるよ！ おい、聞こえねーのか！？」

……………。えっ、僕！？」

また！？」

「早く！」

いや、助けたりしたら一部の人達がとっても残念に思うだろうし

……

「お前を売るぞ！？」

「3P？」

ええええ！？」

うー、仕方ないなあ……………。

び……………む。

「によぐわあああー！？」

「……何、その謎武器」

- 8歳になれば取得できるよ。ライセンス

「あんの!？」

うん。ホラ、物語に戻りなさい

「……アンタ何者？」

戻りやがれ

「……はーい」

そんなこんなで雪人は小人に出会いました

「どんな!？」

黙れ

「……」

よし良い子。

小人が雪人に言いました。

「お前さんの初めて をくれたら森の外に案内してやってもいい
ぜギョベベベベベ!」

キモっ!

「んのわあああああ!？」

いつのまにやら小人の仲間がぞろぞろぞろぞろ。

そして雪人を押さえつけました。

「助けて誰か助けてー!」

雪人は顔を赤く染め、瞳を潤ませ、ピンクの唇をうつつすらと開いてそれはまるで何かを誘っているようになっていけないいけない。

これ全年齢対象……の筈だし!

「おめー助けるつつつてんのが聞こえねえのかよおおお!」

えー……襲われる君が悪いんでしょ……

「段々荒んできてるぞお前!」

だってさ……もうどーでもいって感じ……

僕の着ていた黒いローブが、小人達の手によって脱がされました。

ありえない感じの将来。
(前書き)

元ネタはありません。
一番ありえないです。

ありえない感じの将来。

ほぎゃー、ほぎゃー。

「よしよし」

僕は、白い髪に黒い瞳をした赤ちゃんを見つめました。

「旅の途中にガキ作るとかいい度胸してるよな」

ピンクの髪の青年、ハルトが言いました。

「うっせーなあ……」

それに僕の愛しい人、雪人が、顔を赤らめながら言葉を返します。

「照れてんじゃないわよ、女顔の癖に」

「関係ねーよ!」

アンジェリーナ、いえ源三郎……あ、アンジェリーナでいいんですけどっけ。

彼女も雪人をからかいました。

「赤ランタンちゃん、僕と作ってみない?」

「いやむしろ俺と……」

「お前ら抜け駆けすんなよ」

「お断りですー。赤ちゃんの名前決めたんですか?」

赤ランタンちゃん……本名、ロウの問いに、僕は首を振ります。

いつも断られてますね、アキトにナツトにハルト。OKするほうがどうかしてますけど。

「兄さん達馬鹿みたい」

フユトが呆れ気味に言いました。

目指すは敵の根城。そこには黒ランタン君も鏡も変な彼女もエンテラも義母も……とにかくみんな居るはずですよ。

そしてそこでパーティ合戦をするのです。絶対勝ちます。そのためだけにはるばる旅してるんですから。

長い長い道程……しかももうすぐです、平和は……！

あ、この子産んだのは僕で、作ったのは雪人です。僕？ ナレー
ターなんて性別はないですよ。

ありえない感じの将来。(後書き)

終わりです。

続き書けやオラ！ というのがあれば頑張って書こうかと思いま
す。無いと思いますけど。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4955d/>

童話冒涇物語。

2010年10月15日21時43分発行